

令和3年度「伝えよう！本の魅力コンテスト」ツイッター部門 受賞作一覧

◆最優秀賞

『斜陽』（太宰治／著 新潮社）

高貴なるお母様、もうどうすることも出来ないのね。私は落ちて、落ちて、落ちてゆく。(40)

◆優秀賞

『ストーリー・セラー』（有川浩／著 幻冬舎）

「命を削って思考する」

文字通り考え続けると死んでしまう病にかかった女性は、愛する者のために小説を書くことをやめなかった。胸がぎゅうと締めつけられて、苦しい程切ない。だけどその中には彼らの愛があふれていた。(102)

『記憶屋』（織守きょうや／著 KADOKAWA）

「あの、誰ですか」あなたがいきなりこの言葉を友人にかけられたらどう思うだろうか。大学生の遼一は記憶屋によって先輩・杏子の記憶から消されてしまう。忘れたい記憶を消してくれる記憶屋。一見、いい人に思えるかもしれない。しかし、抱く感情は恐怖。本当に記憶を消すことは良いことなのだろうか。(140)

『宇宙への秘密の鍵』（ルーシー&スティーヴン・ホーキング／著 岩崎書店）

「カタカタ」「ワタシハ…」誰もいないはずの隣の家から最近不思議な音がきこえる。好奇心旺盛な男の子ジョージは勇気を出して扉をくぐる。「あんた、だれ」現れたのはブロンドの髪の子だった。後にこの出会いは宇宙へと繋がる運命的な出会いだったと知ることになる。ここから始まる宇宙への旅。(139)

『クビキリサイクル』（西尾維新／著 講談社）

絶海の孤島、集められた天才達。次々と発生していく殺人事件を追うのは、占い師でもなく学者でもない、何の才能も持たない「ぼく」だった…。話が進むにつれて明かされていく真相。どれが真実でどれが嘘なのか、それともただの「戯言」なのか。最後に告げられる結末には読者全員が息をのむはずだ。(138)

『氷菓』（米澤穂信／著 KADOKAWA）

「わたし、気になります」

日常に潜んでいる小さな謎解きから始まった折木奉太郎の日常は、好奇心の申し子、千反田えるによる一言に巻き込まれるようにして変化していく。きっとこれを読んだ君は、今までとは一味違う日々を送れることだろう。爽やかで、少しほろ苦い青春ミステリーはこの本だけだ。(138)